

曲阜徐州開封洛陽西安旅行記

濱, 一衛

中里見, 敬
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門 : 准教授 : 国際文化学

<https://doi.org/10.15017/18370>

出版情報 : 言語文化論究. 25, pp.200-178, 2010-03. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

曲阜徐州開封洛陽西安旅行記

濱一衛 著
中里見敬 整理

〔解説〕

九州大学附属図書館濱文庫には、一九三〇年代北京を中心とする中国演劇の資料とともに、濱一衛（一九〇九—一九八四、九州大学教養部元教授）本人の未刊原稿が十種近く残されています。今回初めて発表する「曲阜徐州開封洛陽西安旅行記」（濱文庫／日文戯曲／21）はその中の一点で、原稿用紙に清書のうえ製本され、さらに推敲が加えられた状態で保管されています。旅行記は西安に到着したところで中絶しているように見えますが、この状態で製本されていることから、これ以降は執筆されなかったようです。別に小判ノートに筆記された『曲阜徐州開封洛陽西安旅行記』メモ帳（濱文庫／日文戯曲／21）も残されていることから、旅行中すでに旅行記の構想を詳細につづっていたことが確認されます。

濱一衛は一九三四年五月から一九三六年六月まで北京（当時は北平）に留学し、帰国前の三六年二月二十九日、この旅行へと出発します。ときに濱一衛は従来の文献による戯曲研究に飽きたらず、実際に上演される演劇それ自体を研究しようとする情熱に燃えた二十六歳の青年でした。この旅行記は盧溝橋事件前の華北華中西北地方の様子を詳しく記しており、当時日本人が中国を旅行する際の状況も知ることができます。そうした一般的な旅行記としての価値以外に、濱文庫所蔵の天津および開封の戯単はこの旅行中に観劇したものであることが判明するほか、同文庫の唱本の一部はこの旅先で入手したことも推測されるなど、濱一衛の演劇研究との関連でも注目されます。

この旅行記で数回言及されている木下李太郎（一八八五—一九四五）が、

奉天（現在の瀋陽）の南満医学堂教授に在職中、開封・洛陽を巡り、龍門石窟を見る旅をしたのは一九一七年のことでした。興味深いことに、濱一衛の行程は李太郎のたどったルートをおおむね踏襲しており、李太郎の関心に寄り添うように遺蹟や仏教芸術を見て回っています（なお、李太郎が京劇にも通じていたことは「北京」「北京及び其附近」等の文章を参照）。文章の風格もまた「客観的な情報が多く」「明晰で論理的な筆運び」（石川巧後掲論文）と評される李太郎の紀行文と相通じるものがあります。そしてなによりも、二人の研究対象への接近のしかたや中国を見る眼差しには多くの共通点があるように思われます。李太郎に後れること二十年、近代日本の中国観が確立した時代を生きた濱一衛の、演劇研究をとおして中国に関する知の産出にコミットするというポジショナリテイが、李太郎を参照することにより浮かび上がってきます。と同時に、そのようなポジショナリテイに解消され得ない戯迷・濱一衛独自の個性もまたこの地点から見いだされることでしょう。そういった意味で、『北平的中国戯』（東京・秋豊園、一九三六、中丸均卿との共著）で中国演劇研究者としてデビューする直前に書かれたこの旅行記は、濱一衛の原点を示すものとなっているように思います。なお、関連する論考として、石川巧「木下李太郎の『支那』通信と『支那学』の成立」（『九大日文』二、福岡：九州大学日本語学会「九大日文」編集委員会、二〇〇三）をあげておきます。

本稿の公表にあたっては、ご令嬢の藤本康子氏よりご快諾をいただいたばかりか、濱先生の生前の貴重なエピソードもご教示いただきましたことに深く感謝いたします。大阪人という印象の強い濱先生ですが、西鉄ライオンズの大ファンで、よく康子さんと二人で平和台球場へ応援に行かれ、「その時は子供のようにはしゃいで、勝てば大喜びで、負けるとむっつり」というほどだったそうです。また「死ぬまでに一度は北京へ行って、周先生にお会いしたかった」と、留学中下宿してお世話になった周作人との再会がかなわなかったことを心残りにしておられたとのことです。濱文庫所蔵資料からは窺い知ることのできなかつた濱先生の周作人への思いを、ご令嬢の回想により確認することができたことは大変に意義深いことです。

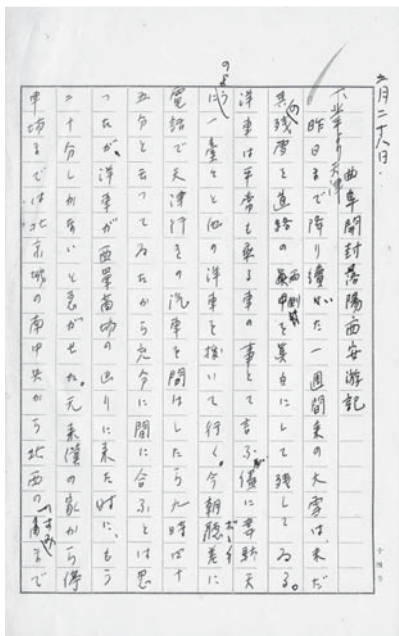


図1 「曲阜徐州開封洛陽西安旅行記」原稿
(浜文庫/日文戯曲/21)

- 〔凡例〕
- 一、原則として原稿の表記を尊重したが、旧漢字・旧かなづかいは常用漢字・現代かなづかいに改めた。漢字の送りがないについては、原稿のままとした。
 - 二、句読点はおおむね原稿に従ったが、読みやすさを考慮して、句読点を追加したり、読点を句点に改めた箇所もある。
 - 三、原稿用紙欄外に頭注として記されている著者の原注二箇所は、文中に挿入した。文末の注はすべて整理者による。
- (以上、中里見記)



図3 1936年2月29日、天津・中原公司遊藝場の戲單
(戯報) (浜文庫/集181/未整理)

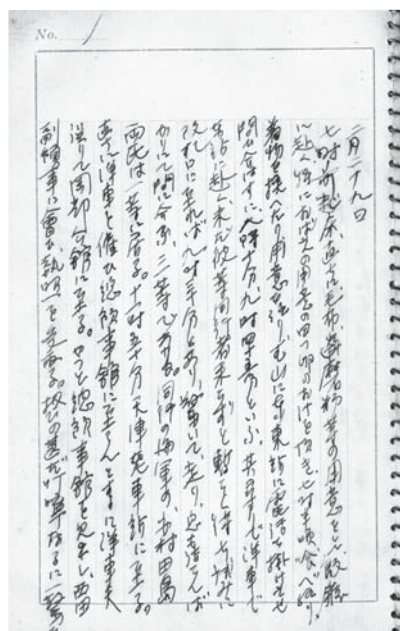


図2 「曲阜徐州開封洛陽西安旅行記」メモ帳
(浜文庫/日文戯曲/21)

一、北平より天津

二月二十八日。昨日まで降り続いた一週間来の大雪は、未だ其の残雪を道路の西側を真白にして残している。洋車は平常も乗る車の事とて言う儘に韋駄天のように一台一台と他の洋車を抜いて行く。今朝聴^{ホイ}差^イに電話で天津行きの汽車を問わしたら九時四十五分と云っていたから充分に間に合うとは思ったが、洋車が西単商場の辺りに来た時に、もう二十分しかないと思がせた。元來僕の家から停車場までは北京城の南中央から北西のすみまでの距離だから、日本里にして一里は間違いない。西単商場の辺りが丁度真中に当る。東車站に着いた時は急がせた精か九時二十分で、発車迄二十五分ある訳だ。明々と天井の硝子窓からの光線を受けた大きな待合室には割合に人が居ないのに少々変だとは思った。案の定、旅行の初めに意外の失態を演ずる所であった。約五分程待合室のベンチに腰を下していたが、落着かないので改札口の所へ行き試みに天津行きの時間を訊ねてみた。発車合図のベルと、九時卅分という答とが同時に聴えた。切符は車中で買う旨を答えて、トランクと毛布を下げて懸命にかけ出した。向うの方に同行のN君の姿が目に入った時には走る力も無くなっていた。

三等車に収まって暫らく息が静まらなかつた。発車後間もなく、憲兵護路兵を従えた物々しい検札係が来た。最前の改札係の言の如く一倍半の料金をとられた。改札係で切符を買うひまが無いからという風の証明書様のものを貰って来れば良かったのだが、鈴が鳴り、もう停車場が静かになつてゐる時分に支那人特有のスローモーションで鉛筆を舐めてゐるのを見ると待つ気がないので、それを貰つて来なかつたのである。随分無法な罰則であるとは思つたが、こうでもしなければ、停車場の雑間に紛れての無賃乗車は防ぎ得ないのである。北平の市内電車でも二区間を一区間の切符で旨くゴマ化そうとして揚げられてゐるのをいつも

見る。自分は知らなかつたのだ、五銭や十銭は何んでも無い、とくりかえし他の客人に言うでも無く自語するでも無く、頻りに弁護している。此んな連中の事であるから長途の汽車では、日本の入場券乗車とか、キセル乗りとかの方法よりずっと優れた方法があるであろう。

汽車が豊台に着いた。自分は嘗て植木で有名な黄土崗へ行く為めに下りた事があるので印象に残っていた町である。窓から町の様子を眺めようと思つて、チャツと眼に入つたのは、待合室に貼つた小さい紙切れであつた。日本の憲兵の派遣所という意味の巾五寸長さ二尺位の紙片であつた。顔を窓に当てて上を見ると、日の丸の国旗がひらひらとしている。よく人は日本の陸軍が支那でやつてゐる仕事を悪いとも言わないにしても非常に不味いという。此には同感である。旅行者の特に眼に入る様に日本国旗を挙げるのは何ういう意味であろうか。日本憲兵の駐在を示す為なら、貼紙一つで間に合うと思う。徒らに支那人の感情を硬化せしめる。有害無益というのは此んな事であろう。現に座席の向い側の四人の支那青年は互に旗を見上げ、また小さい声で此方をチラチラ見ている。何か言つてゐる。間断無しに日本の憲兵がギョロギョロ乗客の顔を覗き乍ら通つて行く。こういうことでは日支親善といつても口頭禪を出ないであろう。

二、天津より曲阜

午前十一時五十分汽車は天津に着いた。総領事館で執照^{パスポート}を受取つて、夜の汽車の時間までを中原公司の遊芸場で過した。三層の落子館、四層の評戲場電影、五層の大劇場と皆観て二毛というから安い。大阪の楽天地といった所であろう。大劇場の良い場所は二毛の追加であるが、今は張淑蘭、楊博生であり、此の前は梁韻秋、級を出演させてゐるのであるから決して高くはない。天津の人の話では何時も此の様に満員だという。大劇場の皮簧⁷は玉

堂春⁸を演つていて、しばらく覗いて観たが別に変わった事も無いし、四樓の評戯⁹も北平の評戯と全然変りが無いので、三樓の落子館¹⁰を聴く事にした。

丁度花小紅の梅花大鼓¹¹の黛玉帰天¹²から聴いた。二胡二丁と琵琶の伴奏で例の通り賑やかなもの、合手毎に喝采を得ている。種々の大鼓の中で最も好きな梅花調であつたので陶然として聞いているが、勿論北平の郭小霞にも及ばない。北平と變つて居たのは河南墜子¹³で、右手に拍板を左手に箸様の竹切れを持つのは同様だが、腰の低い台に乗せた黒塗りの大鼓が見当らない。勿論北平でも大鼓無しに墜子を聴いた事が無い訳では無いが、珍しいと思つた。

其夜六時二十分発の二等寢台で袁州へ向つた。上海特急の二等寢台はとも立派で日本の其よりも或いは立派ではないのかと思われた。場所が広いばかりで無く、貸付の毛布敷布の類も清潔で氣持がよい。茶房の客扱いもよいし、列車の車掌も一寸日本語を交ぜたりして愛嬌を振り撒いた。寢台に横わり、種々の曲阜案内記に眼を通す内に軽い眠りに入った。

次の日(三月一日)午前六時半頃起き洗面を終え窓外より朝の景色を眺めた。昨年の六月頃に見た南満の景色を思い出した。自分には何処か荒涼という感じがした。遠くに霞んだ山々は、朝鮮の山々の様に屹立し、峨々たる感じを起させる。昨夜よく眠つた為め、泰山の雄姿を望む事が出来なかつたのが残念であつた。間もなく汽車は曲阜に着いた。駅の傍に堂々たる構えの鐵路賓館の今は荒れ果てて、取り毀すでも無いのが眼にいった。其前の駅の木柵に山東牛が黄色い細面をのんびりと伸して、屈託の無さそうな顔をしている。日本を離れてから労役に使われている牛を長く見ないので随分珍らしく感ぜられた。

七時五十分に予定地の袁州に着いた。駅を降りて花園の前まで来ると、車拉きや旅館の客引きが恐ろしく沢山群つて来る。手に

掲げている物を奪う様にするのは參つた。元々旅館に止まる氣は無いので、其附近の豊泰樓と看板の掛つた飯館に入つて朝飯を喰う事にした。二三十分も待たされ、極めて不味い鶏絲湯面を喰わされたが、其間其処のボーイに曲阜の孔子廟に行く方法を訊ねたが結局、城内にも自動車は無いし、曲阜行きのバスは既に出たから、洋車で行くより仕方がないし、其では三時卅分発の徐州行きには間に合わ無いという事である。止むを得ず駅前の鐵路賓館に宿る事に決めた。此の宿屋は公園の横手に在つて、最近建築されたらしく、内部も清潔だし、外観も簡易建築ではあるが、クリーム色も晴ればれと近代的な感じのする、此んな田舎では珍しいものであつた。特に建物の周囲に贅沢に取つた花園は一層此の宿に清新な感じを与えていた。一宿二元四毛という七号室を取つて、曲阜へ行く様に洋車を僱わせた。往復で一元五毛で約六時間かかり、其里程は六十華里¹⁴という。鉄路に沿ひ牌樓を抜け、ガードを通り、左手に紡績かも知れない大工場を前に見て間も無く、大きな河に着いた。即ち泗水である。道路は石造の中広い橋に続いている。(此地は前清袁州府南濟寧へ全長三十二哩の袁濟路支線がある。)もつとも此んな橋を何んと呼ぶか知らないが、相当長い橋の途中二箇所ばかり溝の様に切れていて、平常の極く少量の水が通つている。水が出れば、氾濫するのに決つているから、此んな種類の橋が一番よいのであろう。河底から一二尺高くなつていゝのである。高い堤防を上ると坦々たる大道が遠く霞の中に連つていゝ。五間巾の道路の要所には非常の時には望樓に使うのである。日本の鍾樓の様に方形の新しい建物で、曲阜へ行く迄に数個あり、夫々に名前が横に刻してある。又行亭の間には、馬路¹⁵を監督する人の詰所だ相だが、煉瓦造りの房子¹⁶が数箇所あつた。別に夫んな人の居る様子も無かつたが、行亭や看馬路の詰所も目下新築中の物のあるところより想像すれば、人を派するに至つていないのかも知れない。道路の両側には一間置き位に、街

路樹の樹が植わつて居り、土の色も新しい。陸軍二十師が造つた相だが二華里毎に道路標がある等、万事至れり尽せりで、現在大躍進しつゝある中華民族の姿を眼前に見る様な気がした。曲阜へ行く間に乗合自動車、新式乗用車（師団の自動車という）、土牛車、手車、自転車の乗物に出会つた。

途中、特別に変わった景色とて無かつたが駅より程遠からぬ所にある師団の営舎が、道路より数百米離れて正対し四壁に銃眼を持つた堂々たる構えが特に眼についた。彼処此方に松柏樹に囲まれた古墳が多い事と、遠くの樹々の間に宛然湖水の存在するが如く見ゆる現象もよく眼に着く。水蒸気的作用であるうが不思議な事である。

約二時間餘にして建設新曲阜と横書標語のついたアーチを過ぎると両側には蒼然たる古色を帯びた家々が並んでいる。何れも小商売の様であつた。車が城門を潜る時に巡警が一寸車夫に問い、車夫が日本人だと答えるだけで何の事も無い。

三、孔廟

聖廟は即ち孔子の「闕里」故宅で、面積甚だ大きく、全城の半を占め、周囲は高い牆で囲まれ、頗る莊嚴である。大成門の右側より進めば大きな庭には天をも衝かんばかりの古柏が太い幹を延している。其の間から黄色い屋根や赤い壁が見ゆる。誠に聖域の感じを失わない。案内人は「老夫子が小さい時に種えた楡で、今では石同様になつている。」と説明する「孔子手植楡」を見る。曲阜県志によれば晋懷帝、永嘉三年に枯死してから、隋唐宋金元明と何代も、枯死しては生え、生えては枯死し、今日のものは清雍正十年に廟の建築が出来てから又生えたものという。幹が鉄の様に堅いので、又鉄樹とも云う。

手植楡を見て、磚路に沿つて北へ進めば、黄瓦の亭があり、非常に美しく、正面に豎匾があり、杏壇の二字がある。即ち孔子の

講堂の故跡である。勿論今では其んな様子も無く、旅行者の休息所になつて居る。其れより真直に北へ石畳みを行くと、大成殿の前に出る。此の大成殿は勿論支那中で最大のものである。特に偉大なのは正面の十本の龍柱である。大理石を以て造られ各柱には石龍が彫られ殊の外美しい。殿の周囲も大理石の欄杆で取囲まれている。殿前に入れば古建築特有の、木の香というか、土の臭いと云うか、一種特別な臭気がある。殿内には又四本の木柱あり甚だ太い。殿の正面の神台には、平天冠を頂いた孔夫子が温和な顔をして、手に玉板子を持ち、坐している。像の前の神位には「至聖先師孔子神位」とあり、香煙は繚繞として細い線を描いている。この春とはいへ未だ余寒去らぬ三月一日頃に参詣する人も多くないと見え、他に参詣の人は無い。辺りは静まり返り、自分の靴音が無気味に大きく響く。其の左右には四配十二哲の神位が列べられている。又院中の東西兩廡には先賢先儒の木主を列する。

大成殿より出でて殿の旁らの回廊を通つて後へ行けば寝殿に至る。此の七間の寝殿は張宗昌督軍が修理する迄は、迎も荒れていたという。殿中央には孔子夫人の牌位がある。寝殿より更に後面に到れば聖蹟殿である。五間の聖蹟殿には多くの石刻が整然と並んでいる。孔子の像や講義している図や、種々百十二幅あるという。

大成殿の西が啓聖祠で孔子の父母を祀り、東が崇聖祠で孔子五代の祖宗を祭っている。五代祠の旁に古い牆壁がある。即ち魯壁である。魯壁の前に「孔宅古井」という碑があり、その前に古井戸がある。魯壁は漢魯の恭王が孔子の旧宅を壊して其宮を広めんとした時、彈琴の声を聞き、其工を中止したが、孔安国は壁間に孔鮒が蔵して置いた古文尚書、論語、孝經の諸書を得たという、例の有名な遺跡である。古井の方は其昔孔夫子一家の人が日用に供したが今では此の井戸の水を飲む人は無い。飲めば直ちに死ぬという。

其前の大堂は論語の「鯉趨而過庭」の詩礼堂である¹⁸。詩礼堂前の大きな庭院に特に大きい二棵の大樹がある。最も南方の一棵は唐槐に對した杏を宋杏と呼ばれて、何れも数百年の老木である。別に何の故事も無い様である。

四、孔林

孔子の墓と孔子の廟が同一地にあるとは思っていないが、かくも離れているとは思わなかった。洋車夫は顔回を祀れる復聖廟へ行かないかと云ったが、時間の都合もあり、没意思だとも云うので割愛する事にした。天津橋を渡り、万古長春の大牌楼を通り、聖林門に至る。即ち孔林圍牆の南門で左右は守林の人戸が聚っている。史記の孔里というのは此れだという。城楼を進み左に湾つて程無く、洙水橋に到る。橋前に石造の三牌楼あり、上に大きく洙水橋と横書にしてある。橋は石造で白石の欄杆があり、橋下は広く深い溝である。

洙水橋より更に進む事数十歩、墓門に至る。何処に居たのか五十過ぎの案内人が出て来た。墓門を過れば両辺は天をも衝く古柏鬱として茂り、二間余の石畳み道の尽くる所に殿屋を望む。殿前左右に石柱石獸石人あり、一對の麒麟は老夫子の列国周遊の際車を引き、一對の虎は其際老夫子を保護したという。更に進んで享殿を過ぎると右側に亭があり、中間に枯木あり、其前の碑には楷書で「子貢手植楮」とある。其樹枯死して既に六百年になると。其の北に立派な四角亭あり。前清の駐蹕亭で康熙乾隆帝等の孔林に遊んだ時に造つたものである。北行して西転する事数歩、即ち孔子の陵墓を見る。墳の高さ十余尺、墓前に石碑あり、紫黒色にて、頭上に二条龍を刻し、碑面には金色も燦々として、「大成至聖文宣王之墓」と篆字で刻まれている。

孔子墓より西に進めば一片の平坦地あり。其処に三間の殿屋あり、中央向つて右手よりに「子貢廬墓処」の石碑が樹っている。

即ち子貢が六年間孔墓に陪した所であるという。帰途子思子の墓に詣で中国第一の靈地たる孔林の千百の樹木が一陣の微風に簌々と動き、僅かに樹々の呼び合う声のみを聞き乍ら軟かな沙地を歩く時、偉大な聖人の行蹟を顧い返り、其の陵墓に詣でるを得た身の幸福を喜ばざるを得なかった。案内人が、孔林の古木は孔夫子の弟子達が老夫子の死後各々其の故郷から持ち来り移植したもので、種類が甚だ多く、更に奇怪なのは、と支那人特有の大袈裟な表情で、一個の鳥も孔林の樹では巢を造らないと云っているのも、お伽の国の話を聞いている様に夢心地であった。

五、袁州より徐州

帰路も孔林から曲阜城外を通つてもと来た道を通つて袁州駅まで行つたのであるが、急がせた甲斐あつて、三時卅一分をキヤツチする事が出来た。昼食をも抜きにして、やつと汽車に乗つた程であつたから、直ぐに食堂車に飛び込み、窓外の景色を眺め乍ら食事をする事が出来た時は、生き返つた様であつた。孟子の故郷である鄒県を過ぎた頃、東方に大きな威容ある山が見えた。恐らく秦始皇が石に自らの功を刻したという邾嶧山なのであろう。臨城却案²⁰のあつた臨城駅に着いたのはもう夕景に近かつた。臨城を離れて間も無く鐵路の西側が急に湖水に近づいて来た。折柄通り掛つたボーイに訊ねると甚公山湖²¹という。地図を案ずれば微山湖らしい。黄河氾濫による微山湖の氾濫らしい。一望大海の如き水中に、大きな樹木が惨めな姿を覗かせている。此の水の下には幾千の生命、幾万の財産が失われているのであろう。流石に支那は大きい。何事でも我々の物差しでは合わないであろう。列車のボーイが何の気にも留めて居ない所も支那らしく大きい。

韓莊を過ぐる頃は日は全く西に入っていたが、運河を通る時、薄明りの中に運河の模様を見て置く事を忘れなかつた。巾六、七間あつて両側は石造りの堤防で、それが夜眼にか古色蒼然と写つ

た。そして其模様は、糧米や旅客を満載した船が行き交う昔を想像せしめ、品花宝鑑²²の杜琴言の姿をさえ想像する事が出来た。今は破れ船一つ無く、鉄橋さえも其上に掛かっている。

利国駅に着いた時は全く日は暮れ、駅にはアセチリン灯が不気味な白光を放ち、まっくらの中に動く人々に神秘的な諧調を与えていた。我々は既に山東省を離れて江蘇省に入っている。柳泉駅を出た頃、自分の横に陰丹士林²³の便服を着た男が坐つてギョロギョロ見詰めているのに気付いた。暫くすると、公安局のものが何処から来て何処へ行くか、名刺を呉れという。名刺を渡し、徐州の模様を聞いている中に、汽車はガタツと大きく動揺して止つた。徐州である。

下車すると便服の巡警は、我々を支那型のよく肥えた制服の巡查に引き渡した。此の巡查が又名刺を呉れという。駅の出口では憲兵が一々旅客の荷物を取調べている。勿論我々は荷物を取調べられる筈は無い。駅の中にも軍人の多いのに驚いたが、街へ入つては更に驚いた。夜の街は軍人の充満であるといつても誇張では無い程である。改札口を出てからは年若い二人の巡警が前の太ちよと換つた。夫々受持があるらしい。前の太ちよが宿屋は中国旅行社がよからうといつていたので、我々は中国旅行社に連れて行かれる事は判つていた。巡查はつい近かくだからと云い乍ら宿屋の客引きや車夫を殴る様に払いのけて——そうすると蠅の様に散らかつてしまふのだが——賑やかな駅前的大通を旅行社へ急いだ。特に眉目秀麗の年若い方の巡警が突然、割合に旨い日本語で何処から来たかと問われ、驚いたが、その返答をしてから、何処で日本語を稽古したかを問うてみた。満鉄の四平街駅にいた事があるのだという。特に我々のためにこんな巡查が来たらしい。

旅行社は満員だというので、其の斜向いの「大金台」という旅館の二階にある優等の部屋に頑張る事になった。九時を過ぎてから夕食を採りに外出した。横丁の華北飯荘へ行き四冷菜六熱菜で

二元というのを注文した。何の部屋からも花拳の音が、間断無く聞こえて来る。四面悉く軍人の様である。共産軍討伐と関係があるのであろう。食後宿へ帰ると巡警も隣室で宿るらしく用意をしていた。各地で同じ宿屋に巡警が宿するという事まで知らなかった私は、当地が特に気風が陰悪なので、こんな風にするのかと、勝手な想像を運らし乍ら寝に就いたのは十二時頃であつた。

明ければ三月二日、昨夜ぐつすり寝込んだ御蔭で今朝は殊の外元気が恢復した様であつた。朝食は昨日の通り、華北飯荘で粥や麵を食つた。正午十二時四十一分の汽車に乗る予定であつたので午前中を市内見物に過す事にした。木下奎太郎氏の旅行記では徐州は洋車も無く道路も極めて狭いとあるが、十数年の間には此んなにまで開けたのである²⁴。徐州丈ではあるまい。各地共に同じ様に、速度には緩急あるとしても発展しつつあるのである。吾師鈴木虎雄先生²⁵が大正の初年長安に行かれた話を伺つていた私は、今日汽車で居ながらにして長安にまで行かれる交通機関の発達に感謝せずには居られない。都会と田舎の相違はあれ支那は近代文明の洗礼を受けて急速な発展を遂げつつあるのである。話が横へ外れたが、道路は広く無数の洋車が彼方此方に屯ろしているし、時々自動車さえ見られる。大きな石橋を渡り大迂回して洋車は城内へ入る。大通の天成という新築の百貨店を観たが此の田舎町には過ぎたものである。其通りは徐州の商店街らしく衝き当りに世界書局の看板が眼についた。裝飾とか、商品の並べ方等全く近代的であつた。洛陽は町こそは大きい、退歩している老大都市という感じのするのは大きな相異であつて、交通の要処と云うところを待み、益々発展せんとする深淵さを感じる事が出来た。然し此の町に日本人の来る事が珍しいのか、或いは巡警が付いているから罪人とも思つたか、一寸した店へ入つても表に黒山の人に来るのには全く閉口した。若し此れから先の各地でこんな野次馬にたかられると思つたが、他の各地では洛陽の城

内の古本屋で少々人が来て困った外は、徐州の様な事は無かった。

六、徐州より開封

十二時四十一分の汽車に乗る様に宿屋のものに言っておくと、もう十一時過ぎから急ぎ立てられた。宿屋のものに旅行社で汽車の切符を買わせてあったので、急ぐ必要は無かったのであるが、急ぎ立てられるままに駅に早や着いている列車に乗りこんだのは、十二時過ぎであった。駅物売りや乗客の右往左往するのを面白げに眺めていたが、余り退屈であったので、駅の風景でもカメラに収めようと、其処を歩いてきた憲兵に写しても構わないかを問うと構わないと云うので、一枚撮ると、其時傍らにきた憲兵が写しては不可というので、あの憲兵が写してもよいと云ったと云うと、此処は別に景色も良くないし写すものは無いではないかと、判った様な判らない事を云っていた。先に許可を与えた憲兵は愉快として彼方へ去ったのは飛んだ御愛嬌であった。写真の問題は今までの旅行者も隴海線²⁶各地で憤慨し、残念がった種々の話を聞いていて、今日隴海線の第一日に此んな事があったので、矢張り写真は駄目かと聊か悲観した。が此れも徐州丈が特別で他は各地とも何の問題も無く、勝手に写真を撮る事が出来た。勿論、徐州の車站撮影を禁止されてから敢て隴海線の駅とか鉄道とかで撮影はしなかった。津浦線²⁷の臨城県では路警に訊ねてから撮影したのであるが、問題は無かった。

徐州を出た汽車は間も無く銅山県に到着した。並行に砲とか装甲自動車の種類を満載した貨車が停っていて、貨車の箱の中には、真黒に日焼けした穢らしい兵士が首をのぞかせていた。此れ等は討共匪に関係あるものであろうが、装甲自動車は素人目にも立派なものであった。

沿線の風景は津浦沿線と別に異った所も無いが、遠くに見ゆる山々も軽い傾斜を持った低い山であるのは、津浦沿線の巍峨たる

それとは全く感じを異にしている。けれども畑の畔に植えられている麦の小さい芽が出ていなのや、ポプラの細長い樹が並んでいたり、楊柳の芽が紅緑に膨んでいるのは同一である。沿線は良く耕されていて、遠くに森林があり、森林と鉄路との間には大きな樹木が点在していて、辺りを睥睨している様である。畑の所々に放ち飼いの黄色い小牛が数頭縦横に走り廻って、戯れていると思ふと、驢馬がそんな所も構わず草を喰い乍ら自分の世界を楽しんでいる。こうした自然の景色は沿線の各地で見られる。鉄道に沿うて道路等があると、木造の四輪車に乗った母娘が、只汽車に向って微笑んでいる。

三時頃碭山に着く。未だ河南省に入っていない。駅に直立している兵士は鉄兜を頂き着剣しているが、只の一人しかいない。駅に特に梨の物売りが多い。素晴らしく大きく、訊くと一斤三十五銭という。二個位しかない様だ。汽車は釜に水を入れて十五分頃発車した。駅を離れると又同様に単調な景色が広がって来る。が両側の畑は今までより際限も無く広がり、楊集に近づく頃が最も著しい。あちこちに羊の群が草を喰っている所があると思ふと、犬の子一匹居ない様な寂しい道の無い所をせつせつと急いでいる人が見当る。今まで照つていなかった太陽が急に照つて来て大きな平原の一半だけを明るくし、向うの低く延びた山は相変らず霞んでいる。

商邱県に着いたのは五時頃、此地周の宋国、微子啓の封地、常に古書に其名を見る商邱で、明清の帰徳府である。駅の北側には城市があるが、殷盛である。徐州へ行くのだと護路兵は云っていたが、廿六路廿七師²⁸の腕章を着けた兵隊の乗っている一個列車が停っている。貨車の戸を開けて食事をしていた。一碗の飯と一菜とである様だ。乞食の持つている様な穢い瑠瑠の把手に垢だらけの太い指を差し込んでるのが更に穢い感じを起こさせる。無蓋貨車に載せてあるトラックの周囲の空隙に、蒲団を敷いて寝て

いる兵士もある。新式乗用自動車の周囲に寝ているもの等は殊の外対照が妙である。卅分程も停つて汽車は更に西へと走つて行つた。

七、開封

開封に着いたのは九時前後であったが、徐州の様に車中に便衣の巡警も居ないし、下車しても割合に乗降の人も少なく、巡警も来て呉れないので却つて不便だと思つたが、改札口のところでは憲兵が荷物を取調べている所まで来ると巡警もいたし、執照を示す事によつて難なく通過出来た事も徐州と同じであつた。平た顔の背の高い巡警が我々の案内役らしく、心得顔に引率してくれる。山陽線岡山駅位はあるかと思はれる堂々たる開封駅の新建築とは、全く不似合いな金網張りで長方形の宿屋の太字で赤色や黒色で何々旅館と書いてある提灯を尻目にかけて、「河南旅社」へと洋車夫に命じていた。駅構内の明るさとは反対に薄暗い駅前で洋車に乗つて、同様に薄暗いが巾の広い平坦な道路を一直に恐ろしい程早く走る。両側には宿屋をはじめ種々の商店が櫛比している。此の流石に省城である町の民生の豊かさに、今更の様に驚くのであつた。「中正門」とある西洋式の城門を過ぎて城内に入った。巡警の一言で何のこともなく城内に入った。城内へ入つても一直に進んで、同様な大通りを右へ曲つて間も無い所にある河南旅社に落ち着いた。間も無く公安局員が数名来て、執照を覘、河南省入境の丸い印を押ししたり、外人入境云々の書類に書き入れるために職業年齢等を形の如く訊かれ、やつと開放された時はもう疾くに十時を過ぎていた。数日來の垢を落そうと近所の新華楼と云う風呂屋へ行き、十二時頃旅宿に帰り、早速床に入った。我々が風呂に入っている間も、風呂屋で我々を待っている巡警には気毒だと思つた。

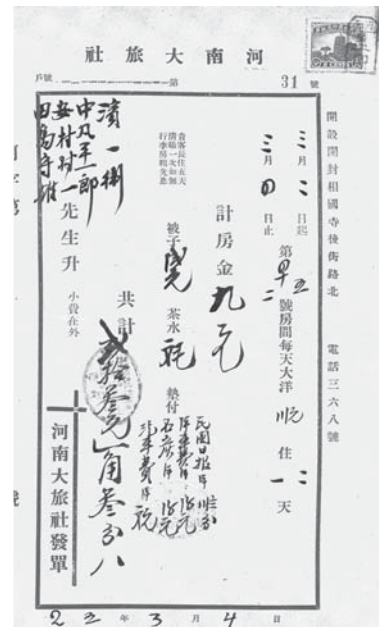


図4 開封・河南大旅社の領収書
(浜文庫/集181/12)

三月三日 曇り模様の空を気にし乍ら八時頃起床、蓮子稀飯を喰つて腹を作つた。この宿の中に「成興」と云う飯荘があるので、次の日一時間三元という自動車を僱い、十時半頃から市内見物に出掛ける。

宿舎より西へ二町ばかり走り、駅からの直線道路を更に北へ進むと、行くと暫らくペンキ塗りの坊があつて、石座は勿論腰から下を土に埋めた一対の宋代の遺物という石獅がいる。(頭注…此辺り一尺集参照)坊を抜ければ長さ十数町の隄堰の様な道があつて其の両旁は大きな湖で、皆宋明時の宮殿の廢趾であるが、昔の人が此に古器物を捜した為め巨沢となつたのだという。俗に東を潘湖といい、西を楊湖という相だ。明洪武十一年に宋故宮の大内である此地に周王府(明太祖の子櫛)を築き、土山を王宮の後に築き遊觀の所とした。清初には改めて貢院³¹とし、雍正九年地勢が低窪である為め貢院を城の東北隅に移し、十二年改めて万寿宮を其の上に建てたという。近年開かれて民衆教育館になり、下の

広い院子³²は花壇にしつくり花弁の栽植は勿論鳥獣も畜養され公園となつている。正殿は「礼堂」と金字の横額が掛り、遊廊には「両河勝蹟」とある横額が掛つている。総五間で遊廊を持つている堂々たる建物で、五六十尺の台上に建つている。内に昔の遺物として、僅かに宝座と称せらるる高さ約四尺許、美事な蟠龍が周囲に彫刻されている石墩あり。俗に龍墩と称せられると。石墩の上には五皇像が祭られていたというが今は無い。堂前の欄杆に倚り、南に遠く開封の町を、近く両湖を眺め、南に東に河南大学や鉄塔を眺めながら、時の経つのを忘れた。殿前の中央部には蟠龍を彫刻した百余級の石階を下り、再び車上の人となる。

走る事十余分、河南大学附属医院の牌樓を抜け、間も無く広場の中央にポツネンと建つた琉璃塔の前に出る。此の塔は城の東北隅にあり、宋仁宗慶曆間の所建、明洪武二十九年周藩によつて修復さる。佛像、羅漢、禽獸（獅子と龍）の浮出た鉄琉璃でめぐらされている。八稜、十三級、高さ百余尺、巍然として直立している。塔中頂上には鉄仏一尊があるというが、残念乍ら、四方の口を漆喰で閉じられていて、今日昇る事は出来ない。今日寺の跡形も無いが、後唐の時代に創建せられ、等覺禪院と称せられ、晋の天福の初め明德坊に在つたのが、宋の太祖乾德癸亥年今の地に遷され、仁宗改めて上元寺と名づく。元末、兵に燬かれ、明洪武十六年重建、天順間改めて鉄塔寺と名づけられ、乾隆十五年甘露寺と勅賜されたが、道光二十一年、黄河の水が汴城を困んだ時に護城の爲め、輒碑碣を拆取したので、遂に廢寺となつた。民国十年、前陝南鎮守使管金聚³³が五千元を捐して大殿三間を建てたというが今日跡形も無い。塔の根元に小さい駄菓子³⁴の小攤³⁵があつて朝の中だからであらう、店の準備をしていた。此の塔は全体が細身で、形も美しく、殊にどつしりした色彩の美しさには惹き着けられた。黄褐緑等の色の織り出す諧調は、宛然古錦を見る如き落着いた感銘を与えた。

十数分後に博物館に着いた。小さい建物でもとは何の廟であつたか明かでないが、二曾祠（曾文正兄弟³⁶）ではないかと思われたが、巡警は何の遺か知らないと云つていた。入場が無料なので種々の階層の人がいた。

最初の建物には此の土地の産物たる石、玉、織物を始めとして、袁世凱の遺品たる清朝の官服、民国の礼服、勳章等の類が陳列されてあり、何のこともない。更に進むと、明器の類が沢山並んでいた。説明が無いので、素人の悲しさ何時代のものか判らないし、又真偽の程も明かにし難いが、各種の馬があり、中でも乗馬姿の武人の、人と馬との調和の美しさには見とれた。又武人も多くあつたが、時代の差があるのか、身体の細長い型と太短い型があつた。

別棟の甲骨の類を置いてある所は入場料を要するので、一人前二百文を払つた。古銭をはじめとして、素焼で製つた物があつた。甲骨類は其次の列の硝子櫃の中にあつて、甲骨の实物は此時始めて見たのであるが、長い時代を経たものであるにも不拘、美しい艶を持ち、刻字は尖鋭で、甚だ鮮明である。生の拓本が並んである次には亀甲の何の文字も無い物、即ち實際トに使用するものは腹で背部は不要のものであるので棄てられたものであるという風に説明書にあつた。又文字刻するに用いる獸骨が如何に大なるものかを示す証左として、古代獸類の肋骨、肩胛骨、牙顎の大なるもの等があつた。又貝類が錢として使用されたという説明があつて、種々の貝類があつた。

此地で有名な新鄭出土の吉金³⁷の部室は此の次の棟である。一室の大部分は新鄭出土品であるが、最後の二列棚のは洛陽出土のものである。所謂古物とは、民国十二年新鄭県城内東南隅李姓の園中に発掘されたものであるが、重要な史料である所から、公の所有となつたのである。説明によれば諸器物の形、口盧の文字より此器が東周のものである事が判明。東周の沿革より言えば新

鄭は始めに鄭都、後に韓都、而も韓都が此に都した時は周烈王元年で此器は戦国時代の文字ではないので、其の鄭国の器物である事を証明する事が出来る。商周の世に祭器を以て送終の具とするものがあるが、この古物発見の地に楕円形の朱砂底があるので埋棺の故の処である事を知り、其の外環形に列した器物は皆殉葬の祭器で、此地は鄭伯の墓たるは疑いを容れない、という。自分等の如く此の方面に全く素養の無いものは、かかる珍宝を眼前に見て、唯ホーと感嘆の声を発するに止まるは内心慚愧に堪えない。

次に二棟ばかり並んでいるのが碑碣の室で女真文字碑、三体石經残石等がある様であるが、何の故か当日は閉められていて観る事が出来なかつた。此の部屋の上に特別の室に石棺が置いてあつたが、何んな由緒のあるものか、説明もないので、知る事が出来ない。出口の辺りに一六二三年の銘のある和蘭製真鍮製大砲が二つあつた。一六二三年と言えば二代秀忠將軍の元和末年なのだから、今更の様に西洋の機械文明の進歩の早いのに驚かざるを得ないが、此の大砲がどんな経路で開封くんたりまで運んで来られたかの因縁話でも説明してあれば種々の感興も起るにと、此の博物館の各種陳列物に説明の行き届かないのに軽い憤慨を覚えながら、博物館を去つた。

それより二十分にして城の東南十数町にある古吹台に到着した。正面中央に古吹台と横書にした屋根の比較的大きい三牌楼あり、それより数十の石段を上れば、農事試験場の看板があり巡警がいる。今は役所中には何も無いというのを無理に中まで見せて貰う。今は全く廟の模様は無く、正面の応接室には昔は禹王の像でもあつたのであろうに、今は洋式の家具調度で装られ、四壁には各種の農業関係の統計表が所せまきまでに貼り着けられている。其処の事務員であろう、非常に気持のよい人が丁寧に招待して呉れて、大いに気を良くした。大門の外の鉄製の太い管を指して、禹王が治水に使つた老東西³⁷だと真顔で説明していた。

自動車の時間の関係で猶太教³⁸を奉じている猶太人が経教胡同に居ると聞き、経教胡同を知っているかと附添の巡警に云うと心得顔に、莞爾と笑つて運転手に告げて呉れたので矢張り旅行者が良く行くのだと早合点していた。自動車が細い胡同を曲り曲り歩く様な速度でいると其辺りの子供が家の中から出てきて自動車を見物している。其中に自動車が停つたので窓から見ると、何とか書寓と看板が出ていたので、先刻の巡警の心得顔なのが初めて判つた。

旅宿に帰り休息後三時頃から、其近くの相国寺へ行つてみた。寺の正面中央には、南面して非常に立派な牌楼があり、其の東西より寺へ出入する様になつてゐる。其の牌楼と同じ並びに、堂々たる公会堂があつた。寺中で一番眼に着いたのは八角殿で飛簷四出して、威辺りを振う底の堂々たるもので、正殿が硝子窓をつけて民衆教育館になつてゐるのを見下している様であつた。

此の境内一帯が北平の天橋³⁹の様になつてゐて、雑多の各種小販は勿論、唱歌、説書、卜相の類が軒を並べ、アンペラ張りの小屋の中から梆子の音と共に、三味、胡弓の音色が聞えて来る。本場の故でもあるのが一番多いのは河南墜子であつた。附添いの巡査に云つて、一番よい小屋へ案内して貰つた。二十坪程の場所では正面は舞台——といつても机が一個あるだけであるが——で支那国旗の色褪せて、薄黒くなつたのが前へかけられている。向つて右手は茶を沸かし茶を入れる処でアンペラで正面は仕切つて横から出入する様になつてゐる。向つて左側は歌い手の控場所、白粉を真白に塗つた、十五六から二十七八才までの女が六七人勝手にお喋りしながら坐つてゐたが、満員の後方の立見席の間を巡査の案内で前方に全部空席になつてゐる恐ろしく時代の付いた藤椅子に腰を下した私等を見て、急に小声で何か耳打ちし出した。間もなく人が變つて、華容道⁴⁰を唱い出した。北平で聴く河南墜子と一寸も變つた所は無いが、大鼓がないので聴慣れない為か、河

南墜子特有の長い合いの手の間に大鼓がは入らないので寂しく思われた。大鼓は無いが左手の竹箸の様な棒切は持っていて、扇子変りに旨く使っていた。又もう一つ北平で聞くのと異っているのは、横手に別に種々の言葉挿む者がいて、単調を破る様になっている。此の二点を除いては北平で聞く墜子と何の変りもない。大鼓を打つ事は所謂大鼓書の流行している平津⁴⁴で演ずる場合には特に大鼓を入れて看客の嗜好に迎合しているのであろうし——何故に短い足の大鼓を使うのか知らない——間に言葉挿むのは費用の関係で特に不可欠のものでもないので、省略しているのである。華容道が終つて、紅樓夢の黛玉帰天を歌っている時に、私が一寸した悪戯から巡警に国旗を指して、国旗と違ふのかと訊ねて見ると、其の青年巡査は驚いた様に、左様だと云つてすぐに歌い手の溜りに悠然といた老婆——興行主なのであろう——に、外のと入れ換えると、威圧的に云つたが、今無いから、明日から換えると、中ば国旗も糞もあるものかと云わんばかりに嘲笑的に云つていた。巡警が老婆と掛け合っている間、看客は騒ぐし、歌は止まるし、一時はどうなるのかと心配していたが、支那の喧嘩に付物の仲裁役として他の巡査が出て来て、其場は落着した。此処は勿論入場券制度で無く、一曲の終る毎に、賞銭するのであるが、北平なら精々銅貨四五個で十分であるのに、勿論我々は巡査を合せて四人いたが、二十銭を巡査の言葉に従い、一曲の終る毎に出すのは、迎も無駄に思われたので、三曲目が終ると、其の席を立つた。

此の境内には種々の小攤子⁴⁵があつたので、唱本見⁴⁶、象棋、玩具等を買つたのであるが、夫を巡査が一物を買ふ毎に一々帳面に印していたのは滑稽であつた。相国寺から直ぐに二日間巡査に厄介になつた。まあ御礼の心算で、二人の巡査に御飯を請んだ。「又一村」という料理屋で後に鄭州の警察署長の平山さんから伺つたのであるが、開封一の料理屋だ相で、其時は値段が高いので驚い

たが、左う云う料理屋で喰べて置いてよかつたと思つた。料理は勿論黄河の鯉が主材料であるが、何れも結構なものであつた。私は厚德福⁴⁷等で喰う河南料理を以て真の河南料理と思つていたのに、今度の旅行で河南各地の料理を喰い、厚德福の料理には違いないが、決して代表するものでは無く、大に北平化したものである事が判つた。

其晩食後相国寺境内にある永安舞台へ行つて、老義成班の河南梆子(土戲)を聴いた。(頭注…参照河南七十一頁⁴⁸)馬双枝、王潤枝、張心田等の一座で、女優が中心の様であつた。昼夜二回で、昼は午前十一時から午後三時まで、夜は六時から十時まで。私は三月三日の夜戲と三月四日の白天⁴⁹と二回聴いた。看客席で北平の劇場と異なる所は站箭で、北平の廊子⁵⁰に相当する場所で竹で作つた箭を買つて入場するのであつて、僕が見た時は二回共、よくまああんなにして芝居を観る気になると思う程の満員で、真の寿司詰であるが、それでも各人共支那人の一種独特の親しみのある楽しい相な顔で芝居を観ている。中心部の池子⁵¹が椅子席であるのは北平と変りは無い。舞台も北平の旧式舞台の構造と変り無く、正面上部には、現身說法と大きな横額が掛り、上場門には金声、下場門には玉振とあり、舞台正面中央部に大多数の場面⁵²が居る。向つて右より梆子、月琴、京胡、三線、単皮鼓の順序で、左手戲台梆子の楽手は、舞台上座蒲団を投げたり、椅子を置き換える役も兼ねている。最初の日には後本梅降雪⁵³、二日目には頭本紫金鐺⁵⁴を見たが何れも只管物語が進んで行く丈で芸の見せ処が無い。唱は勿論梆子調であるが、今迄聴いた梆子調の中では、最も幼稚なもので、始終同じ様に、急に昂り、徐々に下る、という音譜の山を繰り返しているに過ぎない。それに梆子調の特長であるが、度はずれかと思われる程の高音で而も単調で、音楽的に忽んど聴く価値は無い。演技の方を観ても、衣裳、小道具類は京戲と同様で其の割合いに立派であるが、全く田舎じみていて、此んな演技や歌

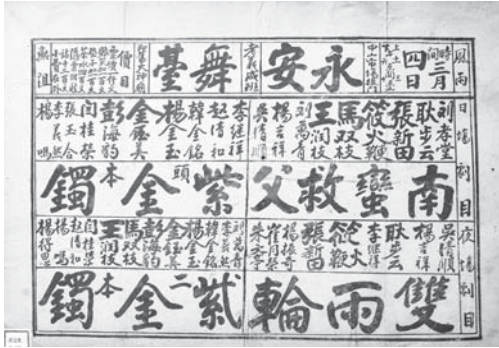


図6 1936年3月4日、開封・永安舞台の戲單
(浜文庫／集181／64)

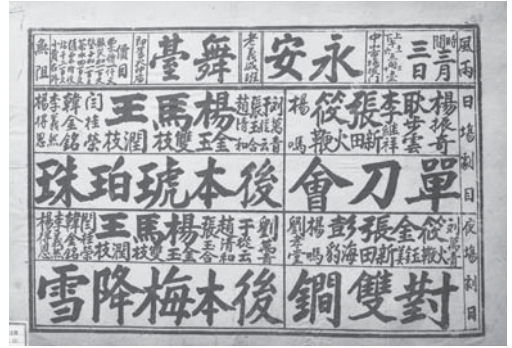


図5 1936年3月3日、開封・永安舞台の戲單
(浜文庫／集181／65)

唱に聴き入り、感動する看客の気が知れないと云い度くなる。仕草の中に一つ特異であるのは、戲台上の進行を表わすために、其の主人公を取り囲んで、円を画き、手下等が回る事で、未だ何の地方の芝居でも見た事が無い。要するに河南梆子は、脚色に正旦浄丑の区別を有し、主として全本物を演ずる非常に原始的な梆子調であると思えば間違いはない。鄭州洛陽の各地に、河南梆子は有るが、省城たる開封が本場らしく、永安、豫声、同楽の三劇場で土戲を演じていた。此うした土戲の勢力という物は主として言語的に範圍が狭く、他省より来ているものは判然と聞き取れないという事になる。他省より来た軍人役人は勿論、土地の人でも長く他省にいた人は此れに一顧をも与えないという結果になり、此うした土戲は一般民衆によつて支えられていると見て差支はあるまい。従つて今日のように全国を風靡している皮黄²²の勢力に段々と圧され気味にならない迄も、發展はし得ないと思われる。

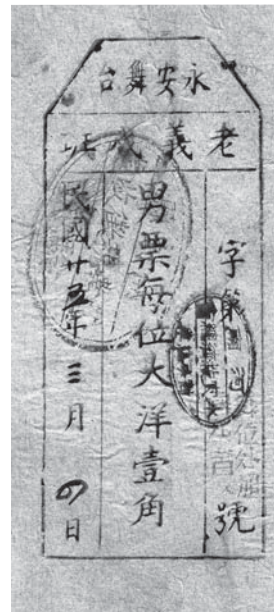


図7 1936年3月4日、開封・永安舞台のチケット
(浜文庫／集181／12)

八、開封より洛陽へ

旅館から駅までの間、巡警が自転車で送って来て呉れて、駅で最初に開封駅で我々を迎えて呉れた巡査に引き渡された。其の巡査は我々のために荷物を持って呉れたり、座席の心配をして呉れたりした。

汽車は二時二十分に出たが、汽車が開封を離れて十五分も経たないのに、風景は徐州からの感じとは全く異う。一面落莫として砂漠然たる光景である。道も無い赤い砂原を瘦せ細った驢馬が満身の荷物を積んで、丸々と着物を着込んだ馬子に曳かれ、数頭並んで行く。烏の大群が急に向うの方へ丁度小豚が餌を漁っている辺りに降りて、豚と並んで餌を探している。お互いに何の関心も無い様に一心に餌を探しているのも異風景である。

韓荘に到着したのは二時五十分頃、駅の柵には、目白押しに汽車見物の人々が並んでいるかと思うと、駅の柵を離れた大木の根本に悠然と長い煙筒を動かして汽車を眺めている。支那の田舎駅の春風駘蕩振りを想像して欲しい。

三時過ぎ捉放曹³⁵で有名な中牟県に着いた。辺りに人家も無い事ではあるし、あんな大芝居のあった土地とは夢にも想像出来ない。

車窓に鄭県の塔を遠く眺めたのは四時過ぎで、間もなく相当大きな城壁を遠くに眺める事が出来た。平漢³⁶隴海兩線の交点である此町の繁盛振りは、列車が繁華な地点を通っている時に幾分想像出来た。

鄭県より滎陽に至る間は、地勢平坦、沿線の南麦畑の様に見受けられたが、元来此辺りは瓜子児³⁵の産地であり、其頃になれば従而西瓜畑が多くなる事であろう。沿線の北方にも南方にも山嶺を望み得るが、南方の山は北方の山に比して高峙している。

滎陽に着いたのは五時十分頃、此の辺りより地形頓に変化し、

汽車は時々、山の切り開いた間を走る。五時三十六分汜水県着。(頭注：窓下に人声あり、何かと見れば乞食なり、実に根気よいもので、停車中、始終何か云っている。列車が二重窓であるので、何を云っているのか全く聞きとれない。汽車が発車してから急に可哀想になり、デッキまで来て、銭貨をやる。こんなに乞食の多い所は外になかった。)それより鉄道は汜水の谷に沿い走る。汜水県を過ぎてより地形に愈々起伏あり、潤阜重疊し、到る所に溝道あり、隧道も相当長いのが数ヶ所あった。斯うした山澗の各地に窟居家屋がある。大体夫と部落を成しているかの如く、固まっている。立派な家になると門がついていて、黒塗りの観音開きの戸が着いているし、其の両側には対子³⁶が張つてある。何れにしても珍しい景色であった。見通しの利く所では北側に遙か黄河を眺むる事が出来るが、舟一艘も見えない。土地の余っている所と思つているのに、鐵路横の二三尺の所にも麦が植えてある。氣候の温い精か、麦が青々としていた。

鞏県に着いたのは六時半頃、遠くに迎も明るい電灯の光が見えるので、何かと思つていたが、それは鞏県の駅に停車していた西安よりの特別急行であった。ドンゴロス³⁷の袋に石炭を入れたのを驢馬に積んだのが駅に集まっている。夫丈でも此処に大きい兵工廠がある事を想像できた。鞏県を出て間無く孝義県に着いたが此処からは、暗黒の中にパノラマの様に分々と照された広大な姿を見出す事が出来た。斯の駅から中山服の支那人に案内された、小柄の外国人が入つて来た。言葉で直ぐ独乙人と訳したが、発車後来た憲兵の質問により「ラインコフ」という兵工廠の技師の様であった。この工廠から、主として化学兵器が造られているという。工廠の方を望めば、明々と照らされた工場のどの煙突も黒々と煙を吐いている。

黄色い土を鏡の様に真直に切られ、其の削られた所に人家がある。其の鏡の面を奥深く掘って、住居とする。道路は山を切り開

いて溝の様になったのが左うで、或る所は全く禿山かと思うと、或る所は階段の様に傾斜地が耕されている。稀に木が生えていると都会の青年の様にヒョロ長い。少しでも日光を浴びたい念願に外あるまい。

九、洛陽

今日一日の種々の珍しい経験を満喫し乍ら、アーク灯の輝く洛陽駅に着いたのは九時頃であった。洛陽の市には電気が無いのかと怪まれたが、憲兵等が荷物を調べている所に辛うじて十燭光⁸⁸位の電灯を発見して、安堵した様な次第であった。例の通り執照を調べ名刺を取って、旅館へ案内される。案内の巡査が「大金台」と旅館の名を喚べば、遙かの闇の中に蠢めく、旅館提灯の中から赤字で「大金台」と印したのが飛んで来た。それ程駅の前は暗かった。開封にもあつたが此の旅館の四角な金網張りの提灯は、子供の時に家にあつた形は此んなに大きくないが、金網張りで、透明のセルロイド様のものを張つてあつたガンドウ⁸⁹を思い出させた。駅前から真直に、細くて暗い通を二町程行つて右に曲つて一丁程行くと左側に大金台旅館があつた。徐州大金台分此等と書いてあるので問うて見ると何の関係も無いという。一番よい部屋に案内されたが随分醜いもので、床は土のまままで破れ窓からは外の冷い風が吹いて来る。天井の角の紙は垂れ下っている。止むを得ず兎も角窓の紙を張り直おさし、木炭を入れた。食事は斜向いの晩景楼で採つたが、巡査の話では洛陽で一流の料理屋だ相であるが、値段の高い割合に旨くなく、一味味が辛くて田舎料理じみている。開封の二流所に及ぶくも無く思われたが、空腹の故もあり、満腹するまで喰べた。旅館に帰り、暫し日記等書く中、睡気に襲われて来たので、横になったが、連日の疲労の所為もあり翌朝までぐっすり睡つた。

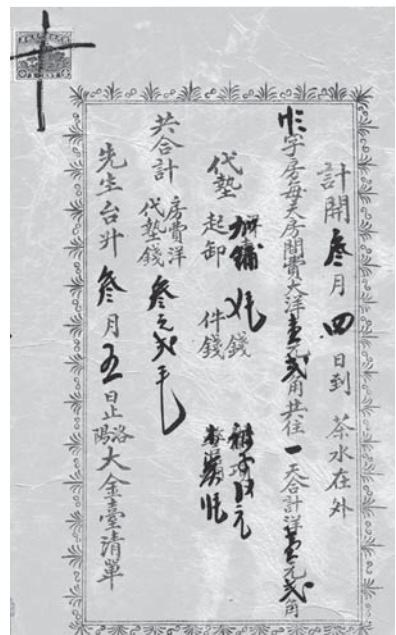


図8 洛陽・大金台の領収書
(浜文庫/集181/11)

今日初めて龍門を觀る事が出来た。何等此の方面に基礎の無い我々は、龍門で費やした数時の間、石崖を上つたり下つたりしたに過ぎない。此んな立派な石仏を初めて觀た私なんかには只感嘆するばかりで、印象を記すにしても何を記してよいのか判らない。余りにも良いものが多いので、一体どれが良かったかといわれると、皆良かったと返答する外は無い。

八時前に起床、九時頃より先ず県庁に行き、それより龍門に出掛ける予定で出発。大金台旅館の横手の大通りを南へ城壁側に右に折れて更に南へ折れると、甚だ規模の小なる城門に達す。場内に入れば道路狭隘にして、行人の衣類にも、絹物を見掛けないし、勿論婦人の華美なる服装を見掛けないのは開封も同様であるが、大商店無く、狭路に多数の通行人のあるにも不拘、活気無く、此の市の民生の程度も想像される。

間も無く県公署に到り、鄭州警察の平山勇氏が紹介して、督察

専署の宋秘書長に会う事が出来、督察專員の姓劉なる人が来て、我々を案内して呉れる事になった。道々の話によると此の劉專員は北平の四存中学、中国大学を卒業したという。安徽の人だというが、子供の時から北平に育ったという程あつて純粹の北平語を話すのは嬉しかった。四存中学の電話番号は西局二二三二六でしようと言ふと、何故知っているか不思議がったので、自分の住んでいる家の電話番号が二八二六で始終間違つて掛かつて来ると云ふと、「妙極」と云つて嬉しがつていた。中国大学で方政英さんに日本語を習つたと云つていたから、日本語が出来ると言ふ所から、我々の招待役に回つたのである。しかし、往復七八時間、劉先生の日本語を一言も聴かなかつたのは残念であつた。

公署を出た車は錯雑な狭路を曲り曲りして非常に賑やかな通りに出た。城内のメインストリートらしく商場等も眼についた。中州飯莊という第一流だそうだがを通つた。中州飯莊と横書の紺納簾の下つた風雅な構えは今の洛陽の町には不似合いな程に思われた。食物の類を売る店が多く、特に焼餅を売る店が多かつた。城内を越すと其処は左右共悉く竹細工を売る店で、大は運送用の籠から小は手提籠、玩具の籠に至るまで種々あり、中には欲しいと思ふものもあつた。間もなく、商店街より住宅街という感じの通りに出た時、空砲の音と共に多数の兵が出て来て、演習の最中であつた。奇抜なのは模型タンクの活躍で、布張りのタンクの下から足が二本出ていて、タンクの前の穴から、汗に光つた顔が、覗いていた。今日は、どんな演習のある日か、上空に編隊の飛行機が爆音を発つていた。車のスピードが落ちたと思ふ間に堤防の上に出ていた。前に流るる美しい流れが洛水である。人力車、自転車と共に扁舟に乗る。水勢強く、水澄み、河底の石すら読みとれる。洛水石として有名なるは此石である。大なるは建築材料に用いられ、小なるは種々の玩物となる。

案内の劉先生に天津橋の所在を問うに下流に在ると云うも見え

ない。隋代に建て宋代に修理したという橋が壊れて一洞だけ残つているという。

洛陽は周公の嘗む所の洛邑で、周書の「我卜澗水東、澗水西為洛食。我又卜澗水東亦為洛食。」澗水の東とは白馬寺以東の地であつて、秦より後、東漢魏晋北魏隋初、洛都というは皆この下都であつたが、今は悉く農田となつて古蹟も無い。澗澗の間は今の県治の所在で周時之を王城と云つた。隋の大業元年に東京を改営して、周圍五十二里、周の王城、下都を合一する大きなものとなつた。唐宋より現代に至るまで其儘で改めなかつたが、今の城は清初の修築する所で、之を隋唐の世に比すれば、比較出来ない程小さくなつてゐるという。然し開封城よりも幾倍も立派な様に思われた。

十、関帝廟

洛河を渡ると一面の砂原で、洋車が走り難いというので、約十町ばかり歩いた。この砂原が夏秋水期になると、水流れとなる所と想像された。南行する事十五華里、約一時間余にして、遠く関林を望む。紅牆を以て囲まれた古柏鬱葱たる森林の如く、其中に黄瓦が光つてゐる。即ち関帝塚である。本道路より左行する事一町余、関帝廟の正面に達す。関羽荆南に畢命、呉人其首を魏に帰す、曹操礼を以て之を此処に葬るといふ。殿宇宏壯、誠に関帝の靈の静まるに適さわしい聖域である。正面の大門を入れれば、石畳み道になつていて、道の左右には極く風雅な獅子頭のついた石造欄杆になつて、鉄の香炉のある所まで続いている。香炉の前の一對の華表も極めて面白いものであつた。第一殿には白い顔をした関公が祭られてあり、鬚を生やしてあり、極めて他愛もないものであつた。この向つて左側には、五虎將軍の像があり、関公を中心に、趙雲、張飛、黄忠らがいた。皆芝居がかりになつてゐるのは面白いと思つた。第一殿の後側に籠に乗つた関公の像があ

る。第一殿を抜け第二殿に進む。此の道は単なる石畳みで左右の欄杆は無い。正面に光昭日月の横額あり、戸の類は忽んど無く、御殿の正面は全開放で、其中に荒れ果てた辺りの光景と不釣合いにも、金箔で光った武者姿の関公の坐像がある。眼を見張り、手を腰に当てた像は、本物の鬚のブラ下がっているのはどうかと思うが、割合によく出来ている。第二殿を抜けると、其処が墓処である。忠義神武靈佑仁勇威顯開聖大帝とか漢寿帝侯とかの字が見える。最も後の陵門には鍾靈処とあり、土塚が高起しているのを覗う事が出来るが、低い垣が環んでいるので、塚の方へは行けない。戯曲小説に於て永遠に支那人と共に生きる関公に一礼して帰路についた。大門の南方に大門に正対せる大戲台を見物し、正門両側の獅子の子獅を背中に背えるを面白く眺めて、再び元来た本道から南行した。

十一、龍門

関林を出て一時間、特に飲食店の多い一小駅に着いた。劉先生遙か彼方を指して龍門だという。河があつて両方からの丘陵が区切られている様な形である。其処で巡查車夫共に昼食として麵を喰べた。今まで嘗て喰べた事のない程、物凄い味で、一腕十五分であつた。北平の一流所でも十二分だのにと、日本人と見て特に値の高いのには気が悪かつた。附添の劉先生も、値が高いと声高く言い合っていたが応ず可くも無かつた。

石仏の觀賞に短い時間を少しでも長く費したいと思つたので、休憩する間も無く龍門に向つた。左手の河は大禹の鑿る所という伊水で、西崖が龍門、東崖が香山である。美しい伊水は西南から淙々と水音を振わして流れている。工事中の道路を通り越した時分、同じ側の微に高い所に山門が見えた。即ち潜溪寺である。

第一の石龕に入ると正面に非常に大きい座仏あり。右手を挙げ左手を膝に置いた円満な容貌をしている。其の両側には各二個の

脇仏があつたが、光線に照らされている左側の脇仏の体線の美しさは勿論、微を洩しているとさえ思われる容貌の美しさには、暫し見とれた。両側の壁には無数の仏像が刻まれているが、何れの一つを取つても、立派なものだろうと、我々素人にも思われた。それより眼を天井に向けて驚かされたのは、天井中央に円形に刻まれた十数個の飛天の群像である。種々の楽器を持った各々の像が浮き出て来る様にも、十数個の群像が回転している様にも、夫々の群像の奏でる楽の音が聴ゆる様にも思えた。凡手の為し得るものでは無い。

第二の石龕は即ち賓陽洞で、龍門石窟中最も有名なるものである。正面に大仏がいて左右に脇仏がいるのや天井の群像も同じである。木下氏はこの等身大の浮彫の群像に三嘆四嘆して、世界屈指のものと折紙をつけていられる。自分もそう云う先前主を以て見物した精か、全く同感であつた。第三洞も賓陽洞と大差ない。想像した様に、洞窟に兵隊が居ずに、僅かに土工等の寝具があつたり、彼等の炊事場になつていたのは、兵隊が居るよりはよいと思つた。三室を出て、ホツとして外気を吸つた。賓陽洞前の一亭に暫し憩うた。俯瞰す可く、遠眺す可く、絶好の場所である。河向いの香山の中腹に香山寺、香山下よりこの龍門の下までは、伊水によつて隔てられている。丁度宇治川の様な眺めで、清らかな水の浅い所に老等⁸⁰が身動きもせず、河中を見詰めている。最前から一匹の魚も其の附近を通らないらしく、多少首をうな垂れたままの姿を変えない。亭の微に赤味を帯びた芽をつけた喬木が、時々の微風に音も無く顫う。実に静かな眺めである。こうした仏教美術に何等の智識を持たない僕は、寺の内外に一龕一仏或いは一龕数仏の小規模のものにまで附刻された造像記を見る時、北魏や唐代の仏教信者の敬虔な礼拝を思い浮べては、眼頭の熱くなるのをどうする事も出来なかつた。そして自分の空想に近い想像は、次から次へと、甘美な夢の世界を追うのであつた。折柄向い

の香山に木魂する銃声に驚き飛び立つ老等よりも、美しい芸術品を観、ぼんやりと空想の世界にふけていた僕は飛び上らんばかりに驚いた。さては名物の匪賊が出たかと、翔ぶ様に山を下り河沿に暢気に談笑して僕等待っていた巡査の一行に今の銃声はと聞くと、微笑して鳥を弾つたといつてピストルを指した。自分の周章でた顔が可笑しかったのかも知れない。

賓陽洞より途中幾つかの洞を観て行く事数丁にして、道も無い様な崖を昇る事二丁余にし、俗に九間房と呼ばれる奉仙寺に着く。後魏に建つる所で、唐の則天武后が群臣に朝した所という。小高いやや広い平地となり、正面の大仏を中心として、左右に仏像が刻されている。中間の盧舎那仏、高さ百三十尺というも、野天にある為、そんなに高いとは思われない。丸味ある頬、二重の頤のなす福相は甚だ美しい。

巡警が日暮を恐れて急ぎ立つるにも不拘、更に賓陽洞に至り最後の別れを惜しみ、元の小駅まで徒歩で引き返し、更に洋車に乗り、同じ道と同じ様にして、旅館へ帰つたのは夕景であった。予定では次の日に、孔子問礼処、周公廟、五夫子祠、白馬寺へ行く筈であったが、劉先生の話で、行っても仕方が無いというので割愛して、翌日夜半四時の汽車で西安へ出発する事にした。

十二、洛陽より西安

夜半二時半、宿のボーイに起され、三時過ぎに駅へ着く。四時前に汽車は出た。それよりとうとうとし、観音堂へ着いたのは八時廿分頃であった。観音を出た列車は急坂を利用して先よりも早く走り出した。沿線の南側に其時に気付いたのだが大きな水の無い赤土の峡谷があった。沿線で眼に着くのは、彼方此処にあり、黄土の太い木の様になったもので、全然孤立した様な形のものもあるし、人家の横にあるものもある。何の用に供するものか知らぬが、恐らく信仰の為に用いるものであろうか。

交口へは八時三十五分に着いた。交口はホンの田舎の小駅であるらしく、人の乗降する様子も無い。構内には牛曳きが、可愛いと云わんばかり、大切に数頭の牛を慈しんでいる。山東牛と称するものは遥か甘肅から陝西河南と労役に用い乍ら、山東で手放すのが普通だという。数年間そんなにして馴れ親しんだ牛を手放す時の感情は又格別なものであろうと、屈託の無い間延びのした牛の面を眺めながら、そんな事を考えていた。枕木を修理している田舎の赤壁に尽忠報国だの、勿忘国恥だの大書いた宣伝ビラが張つてある。こんな処にまで宣伝の手が行き届いているのだ。国民の排日感情を取り除くのは、一片の命令の能くする所ではあるまい。

交口を出て十数分して会興県に着いたが、山西潞塩の集散地という丈あって、田舎駅としては相当な駅で控線等もある。この駅の辺りから地形が平面的になり、特に南方へは緩いカーブの平原を成し、先程の峡谷に接している。不思議な事は此辺一帯の住民は眼がはればつたくて、細い。勿論所謂一皮眼である。全く例外はなかった。窟居生活の然らしむる所ではあるまい。一駅置いて陝州へついた。陝州は想像以上に大きい駅。今朝から気になっていた二人の赤匪が降された。というのは何処から乗つたのか気付かなかつたが、二人の憲兵が附添っていたのだが、危険にも、列車の客席で、実弾を短銃へ装填するのである。銃口を人の方へ向けて為するのだから、近所に座っているものは実に迷惑だ。駅の出口には沢山の人が只漠然と、列車を眺めている。何処が面白いのかと思うが、そんな人々も別に嚴重に護送されて来た此種の人に注意しようとしてもしない。駅の混雑の中には妓女の姿も見える。陝州の町は城壁を隔てているので判然とは覗えないが、相当な町である事は判る。駅の北側には大きな近代の工場があつて黒煙を吐いている。隴海線の一帯で何処でも黒煉瓦焼の窯を見かけられるが此辺りに至つて特に多い様で、窯の附近に積まれた未だ焼かれない

い黄土の整然と並べられているのも美しい。陝州駅から黄河が望まれる。此辺では減水期なのか、幅が五六丁しかない様に思えた。

靈宝に着いたのは十時十分頃。駅の北側には黄河らしきが見え、南方には城壁が見える。駅と城壁の間には近代工場がある。紡績工場かと思われる。迎も立派な禹王廟が見え、其壁に擁護蔣委員長⁶の宣伝語が掛かっている。唐の天宝年間に老子の靈符を此県に得たので靈宝と名づけたという由緒のある県であるが、汽車が靈宝の駅を出て、激水を南渡する時、東側に三層の堂々たる城門の如きものあり、上に横書きで函谷とある。関楼には「未許田文輕策馬」、「願逢老子再騎牛」の聯有りと言ふも勿論見えない。楼内には周時老子西遊した時、関令尹喜が喜んで道德經を受けたという故事に因んで、老子が説經し、尹喜が側に侍している像があるという。(新安にある漢函関に対し、此処を秦函関という。) 函関を過ぎれば、西側には広々とした黄河が眼前に現われ、東側は非常に高い絶壁である。折柄の曇り日に水のある所は大海の如く、水の無き所は砂原の如き黄河が決壊時の被害の如何に甚大なるかは、今眼の当り之を觀て始めて知られる。汽車が黄河に沿って走る時分にはスピード落ちて来る間も無く黄河は平野の向うに姿を消した。常家湾を過ぎ閔郷県に着いたのは十一時〇八分で此駅に廿分も停車していた。此駅は屹立した黄土の山の下にあり、遙かに黄河を望み得るが、一向に県城の様なものはない。駅も閑散で此んな駅に廿分も停車する理が訳らない。向い側のプラットに祖母と母と娘であろう三人共纏足で、祖母と母とは上下黒づくめであるが、娘は真赤な上衣に董色の褲子⁷、水色の靴下靴で立っていて、時にヨチヨチとヨロメクのも可愛い。化粧は拙いが、十五六才の瓜実顔の迎も愛くるしい顔である。

潼関に近づく、黄河が近くに見え出し、北平の箭楼の如き大規模のものも見え、未だ此度の旅行で見ざる底の城門も見え、この城市の稠せる人家も瓦葺の堂々たるもので、此の町の古来より

の重要さ程度も判る。列車が此の駅に着くと、二人の巡警が極めて丁寧な態度で執照を調べた。勿論何の問題も無い。山手側には重なる様に無数の窟があつた。駅前から見られるものは、何れも極く貧弱なもので、只洞があるだけの様で、洞前にボンヤリと列車を眺めている人が、胡人である様に遠目には看えた。駅の傍に日本の長屋そっくりの二階建があつて、藍色のペンキが塗られ、二階窓は障子の様に出来ていた。

潼関を離れると景色は今までとは全く異つて来た。洛陽より西方の沿線は忽んど黄土の秃山ばかりで、時々、黄河が顔を見せるけれども一体に極めて単調で、それに季節も未だ冬を抜け切らなかつた精か、黄河に浮ぶ帆一つを見る事が出来なかつたので、沿線の風景愈々枯荒んだものにして失つた。それが華陽駅に近づく頃から豪壯な形をした秀峰が見えて来た。丁度駱駝の背の様な二つの山、恐らく太華山と少華山とであろうと思われるが、薄曇つた空に巍然と黒く聳びえている。此邑は水利の便もよいらしく、水田が続いて、農夫の使用する農具も思い做しか、日本で使われているものと同様では無いかと思われる。今は墓とても無いのに数個の石神石獸が下半身を土に埋めて、立っている前に手籠を提げた女の子が大きい眼を開けて列車を眺めている。

臨潼を過ぎ灊橋を南方に遥む中、鐵路は城壁に沿うて走り出し、其の雄大なる事、北京城に相並ぶ可く、隋唐の世に築かれたりといへば、或いは弘法大師も長の黄土地帯旅行の後、此の城を眺めた時は、其文化の雄偉に先ず驚異の眼を見張つた事であろう。

十三、西安

今日の西安城は明陝西都督濮英乃の重修で清室の修補を経たものであるが、周秦漢西魏北周隋唐七朝の首都であつた丈に紫禁城に次ぐ大規模なもので、殊に城門の箭楼の宏偉なる事、驚くに足るものがある。

汽車が未完成の堂々たる西安停車場に着いたのは夕景であった。汽車の内へ、中国旅行社の案内係が来たので手荷物を托し、導かるる儘に駅前の自動車に乗った。執照の検査も無いので不思議に思ったが、駅から一丁も離れていない城門に來た時、其処で旅客の荷物を検査している事が分った。主として憲兵が取調べていた。今迄の何の駅よりも嚴重な様に思えた。我々の自動車も止められ、執照を看せる様に命じ、夫を二々自動車の前の胴の上で、写し取っていた。十数分も待たされて、検査は終った。大きな立派な道路を一直線に進み間も無く、西京招待所と印した二階建の堂々たる洋館の玄関に横付けになり、部屋へ案内された。部屋の各種調度は上海から取寄せられたという程あつて、超近代的な物ばかりで、浴室の設備も整っていた。

一風呂浴び、旅に汚れた洋服の塵を払わせ、久々に光った靴で食堂へ出掛けた。僕が自分の部屋に入った時からランプと蠟燭があつたのを不思議に思っていたので、純粹の北平語を話す部屋のボーイに聞くと機械が壊れているという。食堂の方はアセチレン灯が二個吊つてあり、左の一半を仕切つて宴会場になつていて、目を射るばかりかざつた婦人で満ちていた。楊虎城⁶⁶夫人の宴会だと云う事であるが、それにしても此の西安が今日の様に新停車場や此のホテルの様な建築物が続々出来上り、此うした新式宴会を行い得るのも、張司令⁶⁷が当地へ共匪討伐の第一線に臨んでからではあるまいか。西安の今日の繁榮は全く軍人に依つてといつて過言では無い。其れ程町中は軍人で充滿している。市内バスの半数以上は無賃の軍人であるという風の点はあるとしても、市民の大部分、何れも大なり小なり軍人の御蔭を蒙つてゐるのでは無いかと思われる。此んな事を考へてゐる中に注文の料理が來た。僕等同様夕食を喰べてゐる数人の外人がいた。何れも此のホテルに止宿している西安建設の爲めの技師だと云う事を知つたのは、其の次の朝、折靴を提げて出勤するのを見受けたからである。

注

- 1 一九三六年は閏年で、『曲阜徐州開封洛陽西安旅行記』メモ帳¹では二月二十九日とする。また、この日天津で觀劇した際に持ち帰つた濱文庫所蔵の天津中原公司遊芸場の戲單(図3)も二月二十九日であることから、二月二十八日は誤りで、二月二十九日が正しいと思われる。
- 2 「洋車」は中國語で人力車のこと。
- 3 北京城内の北西、八道灣胡同の周作人邸を指す。
- 4 『曲阜徐州開封洛陽西安旅行記』メモ帳²等の資料によれば中丸平一郎を指す。ほかに海軍の安村泰一、田島守雄との一行四人の旅行であつたが、天津までの列車では濱と中丸が三等に乗車し、安村・田島は一等に乗車している。中丸平一郎は一九〇八年東京生まれ。『北平の中國戲』の共著者・中丸均卿と同一人物。『慶應義塾圖書館史』(東京・慶應義塾大学三田情報センター、一九七二。一四八、一七三頁)によれば、「中丸は東洋史学科卒業後、中國に二回に涉つて留學し、中國の劇の研究をした。帰國後は商工部で支那語を教え、一九四四年、商工学校の工業学校への轉換に伴い図書館へ配置轉換となり、一九四五年三月に退職した。中丸平一郎「支那の影絵芝居」(除村一學編『支那文化談叢』東京・名取書店、一九四二所収)、赤星五郎・中丸平一郎『朝鮮のやきもの・李朝』(東京・淡交新社、一九六五)、中丸平一郎「毛三爺在燕京的時候兒」(村松瑛編『奥野信太郎回想集』東京・慶應義塾三田文学ライブラリー、一九七一所収)等の著作がある。
- 5 濱一衛の予感的中し、一九三六年六月二十六日と九月十八日の二度にわたつて豊台で日中兩軍の紛争が起こり(豊台事件)、翌一九三七年七月七日の盧溝橋事件へとつながつた。いずれの事件を起こしたのも、支那駐屯軍の歩兵第一連隊第三大隊に所属する豊台駐屯の中隊であつた。豊台は北京の西南十五キロに位置する交通の要衝で、盧溝橋にほど近い。
- 6 濱一衛『支那芝居の話』(東京・弘文堂書房、一九四四・東京・大空社、二〇〇〇)八九頁に記述のある女優。
- 7 「皮簧」は音楽の腔調「西皮」「二簧」の総称で、京劇を指す。「皮黃」^{ビトウヤン}とも書く。

- 8 名妓・蘇三(玉堂春)と王景隆(王金龍)が結ばれるまでの波乱を描く、京劇の代表的な演目。演「衛」支那芝居の話』二二―二二三頁参照。
- 9 『評戯』は東北・華北地方の通俗的な地方劇。演「衛」支那芝居の話』一―一四頁参照。
- 10 「落子」は東北・華北地方の民間芸能の通称。瀋文庫所蔵のこの日の戲単には「三樓・仕様雜耍」、つまり三階は各種の雜芸とあり、濱一衛の見た「花小紅・梅花大鼓」「鞏玉栄・河南墜子」などの俳優・演目が記されている。(図3参照)
- 11 北京を発祥地とし、天津で発展した説唱芸能の一形式。男芸人が語る一金派と、女芸人が語る花派の二派があった。
- 12 『紅樓夢』の林黛玉臨終の場面。
- 13 河南・安徽を発祥地とし、山東・天津・北京にまで流行した説唱芸能の一形式。
- 14 一華里は五〇〇メートル。
- 15 「馬路」は中国語で道路のこと。次行の「看馬路」は道路警護、道路番。
- 16 「房子」は中国語で家屋のこと。
- 17 張宗昌(一八八一―一九三二)は北洋軍閥の有力軍人で、山東省を支配した。
- 18 『論語』季氏篇に、陳亢が伯魚(鯉)に、父親である孔子から何か特別なことを習ったかと聞いたのに対して、伯魚は次のように答えた。「いつか(父上が)ひとりで立っておられたとき、このわたしが小走りで庭を通りますと、『詩を学んだか。』といましたので、『いいえ。』と答えますと、『詩を学ばなければ立派にものがいえない。』というところで、わたしはひきさがってから詩を学びました。別の日にまたひとりで立っておられたとき、このわたしが小走りで庭を通りますと、『礼を学んだか。』といましたので、『いいえ。』と答えますと、『礼を学ばなければ安定してやっつけていけない。』というところで、わたしはひきさがってから礼を学びました。」(金谷治訳注『論語』東京・岩波書店、一九九九、三三七―三三九頁)
- 19 「没意思」は中国語でおもしろくない、つまらないの意。
- 20 一九二三年五月六日未明、孫美瑤率いる匪賊が特急列車を襲い、百余名の乗客を人質にして一ヶ月あまり立てこもった事件。十九名の外国
- 21 人が含まれていたため、外交問題に発展した。
- 22 「崑山山湖」は、日本語にすれば「なんとか山湖」。最初の一字がわからなかったためボーイがこのように言ったか、あるいは演が聞き取れなかったために、こう記したのかもしれない。
- 23 『品花宝鑑』は陳森による白話章回小説で、清・道光二十九年(一八四九)の作。男色を描くことで知られる。
- 24 「陰丹士林」は中国語の外來語で、インダンスレン染料で染めた藍色の高級木綿。
- 25 木下李太郎『徐州―洛陽』(『木下李太郎全集』第十卷、東京・岩波書店、一九八一、一〇一―一〇二頁。初出は『雄辯』第十卷第一号、一九一九年一月。のち木下李太郎『地下一尺集』東京・叢文閣、一九二二に収録)に、「此地には所謂洋車と云ふものがない。交通には専ら驢を用ひるのである。」もと趙勳が威張つたと云ふこの市街は、道路が極めて狭く、乞食が多く、甚だ不潔にして且繁錯なる商業市である。」という。
- 26 鈴木虎雄(一八七八―一九六三)は京都帝国大学教授の中国文学者、漢詩人。『支那詩論史』、『賦史大要』、『駢文史序説』等の研究書のほか、岩波文庫に『杜詩』、『玉台新詠集』、『李長吉歌詩集』がある。
- 27 江蘇省連雲港(海州)から徐州、河南省開封、鄭州、洛陽、陝西省西安を経て、甘肅省(隴)蘭州まで東西に延びる幹線。一九三六年当時は連雲港から西安の先の宝鶏まで開通していた。
- 28 天津と浦口(南京の長江北岸)を南北に結ぶ幹線。一九三三年から客車を船に乗せて長江を渡る北平・上海間の直通列車が通っていた。一九六八年の南京長江大橋完成により北京・上海間全通後は京滬線と呼ばれている。
- 29 原稿ではこの部分より以下二頁分、乱丁となっているので、正しく整理した。
- 30 原稿の乱丁はここまで。
- 31 木下李太郎『地下一尺集』(東京・叢文閣、一九二二)を指す。同書所収の「徐州―開封」に開封のことが詳しく書かれている。『木下李太郎全集』第十卷(東京・岩波書店、一九八二)一一八―一二八頁参照。科挙の会試を行った試験場。

- 32 「院子」は中国語で中庭のこと。
- 33 管金聚（？—一九二七）は山東省出身の軍閥で、陝西省南部の漢中一帯を支配し、一九一六年から二〇年にかけて督軍に次ぐ地位の陝南鎮守使となった。のち、開封で帰田し、仏門に入ったという。
- 34 「小攤」は中国語で露店のこと。
- 35 湘軍を率いて太平天国の乱を鎮圧した曾國藩（一八一—一八七二、諡は文正）、曾國荃（一八二四—一八九〇）の兄弟を指す。
- 36 青銅器の古称。
- 37 「老東西」は中国語で古いもの之意。
- 38 「猶太教」はユダヤ教、下の「猶太人」はユダヤ人。
- 39 北京の前門の南、天橋一帯は清代から民国にかけて、民間芸人によって様々な雑芸が行われ、庶民の娯楽の中心地であった。
- 40 赤壁の戦いで大敗した曹操が華容道を敗走する際、関羽は曹操に泣き落とされて逃してしまう。『三国志演義』第五十回に題材を取った芝居。演一衛『支那芝居の話』一九三一—一九五頁参照。
- 41 北平と天津の併称。
- 42 「小攤子」は「小攤」と同じ。注34参照。
- 43 「唱本兒」は「唱本」と同じ。『濱文庫（中国戲劇関係資料）目録』（福岡：九州大学附属図書館教養部分館、一九八七・第二刷、一九八八）五四頁の「中国古典戲劇劇本小冊子第五帙」民国七—二十三年 鄭州 聚文堂、興記書局等刊本 一帙二十三冊 浜文庫／集一六六／1—23、および同五八頁の「中国古典戲劇劇本小冊子第十帙」洛陽 新民社、魁文書局、文興印刷所、雪苑山房、文聚堂、西山堂、友文堂等刊本 一帙三十六冊 浜文庫／集一七一／1—36 が開封に近い鄭州と洛陽で出版された唱本であり、このとき購入したものかもしれない。
- 44 「厚德福」は北京の前門外大柵欄にあった河南料理の老舗。
- 45 この原注は、木下李太郎「河南風物談」を指すと思われるが、濱一衛が参照したのはどの版か不明。初出は『美術新報』第一卷第一号（通巻第二八六号、一九一八年十月）一—六頁所収の「河南風物画談」のち、木下李太郎『支那南北記』（東京：改造社、一九二六）三八二—三九二頁に収めるにあたり、「河南風物談」と改題。いずれも七十一
- 頁参照」というのに合致せず、別の本を指すのかもしれない。『木下李太郎全集』第十卷（東京：岩波書店、一九八一）九七頁参照。
- 46 「白天」は中国語で昼間のこと。ここでは昼興行のこと。
- 47 「廊子」は劇場階下の平土間の周囲三辺。舞台が見えにくく、チケットは安かったが、戯迷はかえってここを好んだという。
- 48 「池子」は劇場の平土間。濱一衛『支那芝居の話』一一四—一一五頁参照。
- 49 「場面」は中国演劇で伴奏のこと。濱一衛『支那芝居の話』一四〇—一四七頁参照。
- 50 「梅降雪」は、白狐が命を救ってくれた書生の恩に報いる話。波多野乾一『支那劇大観』（東京：大東出版社、一九四〇）三八五頁参照。
- 51 「紫金鑊」は、公案ものの傑作「四進士」の別名。一九五六年には「宋士傑」という題名で映画化された。波多野乾一『支那劇大観』三二四—三二五頁、『周信芳舞台芸術』（北京：中国戲劇出版社、一九六一）一頁参照。
- 52 京劇のこと。注7参照。
- 53 有名な京劇の演目。『三国志演義』第四回に見える曹操と陳宮の話。濱一衛『支那芝居の話』一七七一—一七九頁参照。
- 54 北平と漢口を南北に結ぶ幹線を平漢線、武昌から広州までを粵漢線と呼んでいたが、一九五七年の武漢長江大橋の完成により、北京・広州間が全通し、京広線と呼ばれるようになった。
- 55 「瓜子兒」はスイカやカボチャの種を煎った食べ物。
- 56 「対子」あるいは「対聯」とは、赤い紙に縁起のよい対句を書いて門や戸口の両側に貼ったもの。
- 57 麻袋のこと。
- 58 「燭光」はかつて使われていた光度の単位。「燭」と同じ。
- 59 光が正面だけ照らし、持つ人の顔が見えないので、「強盜提灯」といった。
- 60 『尚書』周書・洛誥に、周公が東都洛邑を建造する経緯を記す。「わたくしは（まず、黄）河の北の黎水（の辺り）を、（大保とは別に）澗水の東と澗水の西（の辺り）を、（水の流れであるこの辺り）が（新邑の場所として）よろしいと出ました。（さらに）わた

- くしはまた灑水の東（の辺り）をトいましたところが、また洛（水のこの辺り）がよろしいと出ました。」（池田末利『全釈漢文大系 第十一卷 尚書』東京・集英社、一九七六、三六三―三六四頁）
- 61 宮殿や陵墓の前に立てられた巨大な石柱。龍や鳳凰などが彫刻されている。
- 62 木下李太郎「河南風物談」『木下李太郎全集』第十卷、東京・岩波書店、一九八一、一〇二―一〇三頁。初出は『美術新報』第一卷第一号、通巻第二八六号、一九一八年十月。のち『支那南北記』東京・改造社、一九二六に収録）に、「賓陽洞の風俗畫的の大浮彫に至つては、（中略）眞に渾然たる世界的創造的の藝術となしたるものに候。今回御送り申候二枚の拓本の原物の如き、之に比して遜色なき浮彫は果して全世界に幾許か有之候べき。」という。
- 63 「老等」は中国語で、「いつまでも待つ」の意味から、転じてアオサギのこと。「蒼鷺」と同じ。
- 64 蒋介石（一八八七―一九七五）を指す。蒋介石は国民政府軍事委員会委員長であったため、蔣委員長と呼ばれた。
- 65 「褲子」は中国語でズボンのこと。
- 66 楊虎城（一八九三―一九四九）は、張学良とともに一九三六年十二月十二日、西安事件を起こした軍人。濱一衛の西安訪問の九ヶ月後であった。夫人の謝葆真は共産黨員であった。
- 67 張学良（一九〇一―二〇〇一）を指す。張学良は当時、河南・湖北・安徽三省および西北地方の共産軍討伐副司令官であったため、張司令と呼ばれた。

図版の掲載にあたり、九州大学附属図書館のご厚意に感謝いたします。

